

街かどに禅を探し、現代に仏教を見つける (住職記)

めっちゃくちゃな暑さにもかかわらず、夏まつりも花火大会も中止になって、季節感のとぼしい今年の夏でした。そんな七月のある日、朝九時から年忌法要をしました。コロナ禍で親戚一同集まるわけではない。ならば、都合の良い時間に施主一人で営もうというのです。ちょうど亡くなられたお母さんの正当の命日、平日でした。施主は自営業ですから、「その日の仕事の段取りをすませて、寺へ来られるのは九時かな」

それで、朝イチの法事になったわけです。定例の仏事をすませて帰り際に、施主がおっしゃいました。

「ここは、別世界だな」

最高のほめ言葉です。朝早いし、それほど暑くはないので、密閉をさけるため、エアコンはつけずに、窓は開け放していたから、風の薫りがしたのでしょう。そんな所へ、十数分前までは仕事の最前線にいた身体が移動してきたから、別世界であるのは確かです。

ご存じのとおり深山幽谷にある寺ではありません。庭からはAEONと八木橋デパートの巨大な看板が見えます。国道の近くで、自動車のクラクションは聞こえるし、救急車両のサイレンも聞こえます。世界がことなるほどの環境ではありません。

中国の漢詩に「小隱(しょういん)は山中に遁(のが)れ、



Iwasaki Noriko photo

大隱は市井に通れる」という一節があるそう。つまり、「世間がうるさいからといって、山中に逃退するのはまだ小者で、ホンモノはたとえ街中に暮らしても、そのざわつきから邪魔されない」というのです。

まさしく、あの日、本堂での年忌法要を終えて、「ここ

は別世界だな」と感じてくれたあの人は、ホンモノなのかしら。最高のほめ言葉をいただいたから、同じくらいの称賛の言葉をかえしましょうか。

お寺の役目の一つに、「ここは別世界だ」と感じて帰っていただくことにあると思っています。それは、街中の松岩寺でもできることです。でも、ただひとつ条件がある。現地に足を運ばないと、風の薫りもわからないし、光りの影もみえない。

さて、コロナ禍でリモート坐禅会や法事、葬儀まであるという。松岩寺の坐禅会は参加人数が数人だから、もともと三密ではないから、オンラインで映像を流す必要がない。

法要はというと、本堂に無線LANの環境が整っていないので、「すぐにリモート年忌法要をやれ」と言われてもむずかしい。というわけで、ご時世についていけない我が寺です。だから、「別世界」とお褒めの言葉をいただけるのですが。

◇右のページで話題にした、朝九時からの年忌法要の続きです。その二週間前にも朝九時からの三年忌法要をいたしました。こちらは、日曜日でした。理由はというと、やはりコロナ禍で親戚一同集まるわけではないし、法要後に御斎(おとし)を一緒にするわけではない。ならば、朝早く夫婦二人ですませてしまい、後の時間を有意義に使うというのです。その気持ち、よくわかります。たとえば、九時ではなくて、二時間遅らせて十一時から法要をしたとします。その二時間を何か他のことに使えるかというと、使えない。待機時間になっちゃいます。まあ、こんなご時世だから、迷惑をかけないように、できることだけやりましょうか。

◇「できることだけやる」といえば、浄土宗の開祖・法然上人(1133~1212)の次のような会話を思い出します。『徒然草』第三十九段に収められています。ある人が上人にたずねます。「念仏を唱えていると、眠くなってしまうのですが、どうしたらよいですか」。上人の応えがすごい。「目がさめたら、念仏すればよい」。コロナ禍もこれですね、できるようなことなら、やればよいのですが、それまでずっと眠っていると身体に悪いし、眠りすぎて再び起き上がれなくなってしまうかもしれない。だから、感染に注意しつつ以前と同じようなリズムを保っておくのが必要になるのでしょうか。

◇リズムといえば、私が修行道場に入門した時の道場の指導者は、糸原圓応老師でした。圓応(えんのう)老師は、残念



北鎌倉・東慶寺山門

ながら平成二十六年五月に八十七歳で逝去されました。亡くなる二十年前に隠居したあとも、夏は三時、冬は四時に起きる生活をずっと続けられていたようです。もちろん妻帯しているわけではない。家族もないから、単調です。単調だから生活にアクセントをつけるのが、じょうずな方でした。ときどき、愛用のお茶碗を別のものにする。あるいは、机の向きを少し動かしてみる。ひんぱんにやったら迷いますが、絶妙の間合いで変える。生活のリズムを、たのしんでいるようにみえました

◇コロナ禍で、寺で企画していた旅行もしばらくおあずけです。次ぎは、松尾芭蕉の「奥の細道」の追っかけをしようと思つて、何冊か資料もそろえていたのですが、残念です。一昨年まで、「夏目漱石と禅」をテーマに、鎌倉、熊本、松山を有志の方とご一緒しました。「漱石と禅」で最初に行ったのは、日帰り鎌倉でした。漱石は、明治二十七年師走に円覚寺で参禅しています。それから十六年後、その体験を小説にします。『門』です。円覚寺へみなさんで行ったのは、平成29年5月、第2日曜の朝でした。毎回、百畳以上はある大方丈を満席にする横田南嶺管長の法話を聴いたのでした。当然ながら、今春から円覚寺説経会も自粛して閉会中そのかわり、横田管長さまが、精力的にビデオ法話をYouTubeで流しておられます。対談もおもしろい。円覚寺ホームページからたどりつけます。(住職記)